ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ　絵 小笠原小夜

テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

小川哲也さん（48）

＝本別アイヌ協会会長、会社経営、空手道場主宰

空手と通じる神様感じる思想

――空手を始めたのはいつからですか。

十勝管内本別町で育ち、札幌の高校に進んでからです。３年間やり、東京の大学でも続けました。大学を出て３年ほど、東京の道場で働きました。

――それはすごい。今も続けてらっしゃいますか。

本別町と帯広市で道場を開いて、約30人が通っています。この世界で教わった考え方ですが、道場は日々の暮らしでたまった邪気を吸い取ってくれるといいます。だから神だながあるし、練習の前と後には礼をして、全員で掃除をする。いろいろな所に神様を感じる思想は、アイヌと通じると感じています。

――ご自身の会社とアイヌ協会の仕事もあって、おいそがしいですね。

2016年からアイヌ協会の本部理事という役職に就きました。協会の中では若い方ですが、もっと若い人が関わり、自由に意見を言えるようにしたいですね。時々アイヌ文化の行事を主催したりして足を運ぶのですが、この秋初めてイナウ作りや儀礼の準備をやったんです。自分より若い人に教えてもらい、気後れしますけど、知らないことを体験するのは楽しい。今まで漠然と見ていた儀礼の場も、どんな準備があってできているかを知ると、見えて方が変わってきます。

――始める時期も方法も、その人次第で良いと思います。みなさんに伝えたいことはありますか。

アイヌ民族には自然や身の回りの道具にも神がいる、役割があるという考え方があり、それは周りとどう調和するかという思想につながります。人との共生も大事にして障がいのある子を大切にし、捨てられた和人の子を引き取って育ててきました。会員制交流サイト（ＳＮＳ）でだれかを責めるなどのニュースが多いこの時代にこそ、アイヌの哲学を知ってほしいです。

◇

このコーナーではさまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

タンペエエラムアン？

「きみ、これ知ってる？」の意味

■コソンテ（小袖）

日本語の小袖をアイヌ語に取り入れたもので、コソントともいいます。細かなしゅうで花や動物のがらがえがかれたものが多く、晴れ着の一つでした。

ほかに清朝（現在の中国東北部にあった国）からも絹でできた晴れ着がサハリンを通って伝わりました。コソンテやコソントは、やがてこうした立派な着物を指すようになり、中国製はマンチウコソント（満州の小袖）などと呼ばれました。

えらい神様もコソンテを着ています。例えば私たちの目にほのおに見えるのは火の神様の着物で、６枚も重ね着して帯をしめ、その上にも６枚のコソンテを羽織っているといいます。火のぬくもりが神様の着物だなんてロマンチックではありませんか？

（葛野大喜・北海道大学大学院修士課程1年）

がけにあいた穴にあやしい客をさそいこむ。中では激しい戦いが

するとすぐに戦いが始まり、おそろしい音がしました。そして、男はそれきりもどってきませんでした。夫は男が持っていた小袖とタバコ入れを持ち帰り、あらためて見てみると、それはたいそう立派な物でしたので、大事にしまっておくことにしました。

すると、またある日、戸口のところでだれかがせきばらいをするのが聞こえます。見ると、前と同じように白い小袖を着て、銀のタバコ入れを持った男がいます。それも今度はそっくりな男が2人立っているのでした。おくさんはおどろきましたが、夫を訪ねてきた者なので中に入れるよりほかありません。家の中にむかえ、男たちは前と同じように夫とあいさつすると、何をするでもなく何日も何日もとどまって帰りません。そして、ふとした時におくさんを目で追うのです。そこで夫は、前と同じように2人を狩りにさそうと「それでは連れて行ってもらいましょう」と喜んだので、一緒に山に行きました。

前と同じがけのところに来て、「あの穴の中でおそろしい音を立てているものをしとめてみましょう」と言うと、2人はさっそく小袖をぬいでタバコ入れをそれに包んで穴に入り、それきりもどってきませんでした。夫は2人の持ち物を持って家にもどりました。

ネウサラ おはなし

語りながら 聞きながら

仁コロ又コロ

ハチの神の幸

＝有珠の話（吉田巌「アイヌ童話」より）

昔、ウラユシペッというところに、立派なおくさんと暮らす男の人がいました。この夫は狩りに行くと手ぶらで帰ることはなく、必ず2ひきや3びきの獲物を持って帰りました。おくさんは畑作りを一生懸命にし、いつもおいしいものを食べて暮らしていました。

ある時、外に人の気配がするので、おくさんが様子を見に行くと、白い小袖を着て銀のタバコ入れをさした、見たこともない男が立っていました。どことなくおそろしげな男でしたが、家の中に案内すると夫にあいさつをして話し始め、そのままとまっていくことになりました。それから何日たってもその男は帰ろうとしません。何をしたいのかはっきりしませんし、それにおくさんをじっと見ていることがあるので、夫はだんだんあやしく思うようになりました。

そこで夫が「今日は一緒に狩りに行きませんか」とさそうと、男は喜んでついてきました。歩き慣れた山を通って、がけのところまで行くと、向こうの斜面に大きな穴があり、おそろしげな音が聞こえています。「あの中にいるものをしとめてみましょう」と言うと、男は「では私から」と言って小袖をぬぎ、銀のタバコ入れを包んで穴のおくへ入っていきました。

ある日、立派な身なりだがあやしげな客がやって来た

何日かしたころ、夫がねていると神が現れて、「私はハチの神だ。この下界にコシンプクという魔物の6人兄弟がいる。その一番下の弟がおまえの妻にほれて、うばいに来たのだ。おまえがさそい入れた山のほら穴は私の家だったのだ。そこで魔物をさし殺してやった。すると、コシンプクの兄たちが弟を探してやって来たので、また始末しておいた。彼らの持っていた小袖とタバコ入れはまたとない宝で、持っていても心配はないから持っているがよい。残った兄のコシンプクは、私がおさえつけているから何もおそれなくてよい。この先もおまえたち夫婦を守ってあげよう。お酒やおいしい料理ができたときは、少しでも私にささげてくれ」と言いました。

目が覚めてこのことをおくさんに話すと、なんとおくさんも同じ夢を見たというのでした。2人は大喜びし、もうあのような気味の悪い客は来なくなりました。それに、とても見事な宝も手に入りました。それからは、お酒やおいしい料理ができた時にはハチの神をおまつりし、幸運をいのりました。その通りに次々と幸運にめぐまれました。やがて夫婦は年を取り、子孫たちに「ハチの神を大切に。いつもまつることを忘れないように」と言い残してこの世を去りました。

夢に現れたハチの神が男たちの正体を知らせた

立派な身なりの男 実は魔物

このお話は、ウラユシペッという村に暮らす夫婦の家に、立派な身なりをした男が訪ねてくるところから始まります。

タバコ入れは、パイプときざみタバコを入れる箱のセットです。かざりのついた立派なタバコ入れは、正装（よそ行きのきちんとした服装）の一部でした。

さて、こんな立派なお客ですが、どうも様子がおかしい。実は正体はコシンプクという魔物でした。コシンプクは海や山にすみ、とても美しい顔をしていて、会った人をくるわせてしまうといいます。

あやしんだ夫は山に連れ出して殺してしまいます。といっても、夫は穴の中に何がいるのか知らなかったようです。殺すつもりはなくて、なるべく家から遠ざけようとしたか、それとも、ハチの神が夫の心を操って呼び寄せたのかもしれませんね。